

第十二回福島原発事故による長期影響地域の生活回復のための
ダイアログセミナー
「Experience we have gained together（これまでの歩み、そしてこれから）」

日時：2015年9月12・13日（土・日）
会場：伊達市役所シルクホール（阿武隈急行大泉駅、徒歩5分）
< <http://www.city.date.fukushima.jp/soshiki/5/338.html> >

発起人

国際放射線防護委員会（ICRP）

協力と後援

伊達市、飯舘村、放射線安全フォーラム、福島のエートス、福島県立医科大学
フランス放射線防護・核安全研究所、ノルウェー放射線防護局、フランス原子力安全局
経済協力開発機構・放射線防護公衆衛生委員会、日本財団

同時通訳

株式会社ヒラノ（町田公代、太田晴子）

会合関連サイト

ICRP 通信：<http://icrp-tsushin.jp/>
福島のエートス：<http://ethos-fukushima.blogspot.jp/>

第12回ダイアログセミナーの目的

第12回ダイアログセミナーは、「これまでの歩み、そしてこれから」のテーマで開催する。ダイアログセミナーは、2011年の11月を第一回とし、足かけ3年9ヶ月の期間に、福島県内で、あわせて11回開催されてきた。今回、12回目をもって、一連の開催には一区切りをつけることとなるが、それにあわせて、震災から4年半、福島県内、県外の人々の歩みとともに、ダイアログセミナーの歩みをふりかえることをテーマとした。2011年当時から比べれば、現在は、実測データも積み上がり、人々の生活は落ち着きを取り戻してきている一方で、現在も、多くの課題が残されている。確実に前に進む大多数の人がいる一方で、取り残されていると感じている人、これからさらに多くの課題と向き合わねばならない人もおり、2011年から比べると、人々の置かれている状況も、地域、暮らしなどによって、多様化している。

今回、過去のダイアログセミナーに参加した方々にも再度お声がけし、当時、現在、これからについて語っていただくことによって、かつてない事故の後、困難を乗り越えてきた福島の歩みを確認するとともに、現在、未来の課題と希望を見つめ、共有する場としたい。福島県内のみならず、事故後、福島からの声に耳を傾け、見つめ続けた他県在住の方にも参加して頂き、福島県内、県外での視点を交えることによって、複層的な観点から福島を見つめる機会とすることも狙いとする。

<同時通訳>

英語と日本語の同時通訳をイヤホーンで聞くことができます。

<セッションの構成>

午前：発表セッション

午後：対話セッション

<その他>

カメラマン高井潤氏による「末続（すえつぎ）暮らしの写真展」が開催されます。
昼食（お弁当）およびお茶などは主催者側で用意されています。

12日の夕方は、保原の伊達みらいホールにてレセプションを行います。ご自由に参加ください。

プログラム

第1日目 9月12日（土）

9:30-10:00 開会

全体司会：ジャック・ロシヤール(フランス、CEPN)
多田順一郎（放射線安全フォーラム福島支援チーム）

挨拶

伊達市市長：仁志田 昇司
ICRP 主委員会委員長：クレア・カズンズ

自己紹介

国内・海外参加者の自己紹介（各自1分で名前、専門、経験などを話す）

10:00-12:30 セッション1：地域とともに歩んできて

発表：専門家と住民からの報告（100分）

片寄 久巳（ペスコ）：元県職員としての東京電力(株)福島第一原発事故への対応と
反省点

佐藤 理（福島学院大学）：人々の不安に寄り添って

富田 愛（ビーンズふくしま）：ふくしまの親子支援のこれまでとこれから

後藤 素子（小高、新潟）：避難から今まで

保高 徹生（産総研）：この4年間の地域との関わりと研究活動

パネル：あれから四年、末続地区の歩み（45分）

ファシリテーター：

佐倉 統（東京大学）

パネリスト：

遠藤 真也（末続）

高木 宏（末続、区長）

門馬 麻衣子（いわき）

安東 量子（福島のエートス）

高井 潤（東京、写真家）

宮崎 真（福島県立医科大学）

12:30-13:30 昼食

弁当の用意があります。

13:30-14:30 セッション2：農業者の歩んできた道

発表：農業者・酪農家からの報告（60分）

宮崎 晋（いわき、ありがとうファーム）：ありがとうファームの歩みとこれから

山田 猛史（飯舘村）：営農再開への希望

菅野 瑞穂（二本松、きぼうのたねカンパニー）：福島の大地にきぼうのたねをまく

14:30 – 16:30

セッション3：対話：ステップ1—築いてきた道のりについての対話

司会：ジャック・ロシャール（フランス、CEPN）

ステップ1の進め方：

ステップ1で対話参加者は設問に対する回答を2回行う。

初回は自分の意見を述べる。

次回は他の方々の意見を聞いたあとで、自分の意見を述べる。

パネル討論参加者（21名）

住民	富田 愛（ビーンズふくしま）
	後藤 素子（小高、新潟）
	但野 謙介（南相馬）
	安東 量子（福島のエートス）
	遠藤 真也（末続）
	高木 宏（末続、区長）
	門馬 麻衣子（いわき）
	高井 潤（東京、写真家）
	宮崎 晋（いわき、ありがとうファーム）
	山田 猛史（飯舘村）
	菅野 瑞穂（二本松、きぼうのたねカンパニー）
	勝見 五月（伊達市）
	伴 由祈子（東京、大学生）
専門家・行政	片寄 久巳（ペスコ）
	佐藤 理（福島学院大学）
	保高 徹生（産総研）
	佐倉 統（東京大学）
	早野 龍五（東京大学）
保健医療	宮崎 真（福島県立医科大学）
報道	早川 正也（民報）
	菊池 克彦（民友）

16:30 – 17:00 休憩

17:00 – 17:45 報告担当者によるまとめと総合討論

司会：ジャック・ロシャール

報告担当：ジャンフランソア・レコンテ（フランス、IRSN）

17:45 第一日目終了 一階のレセプション会場に移動

18:00 – 20:00 レセプション 参加無料です。ぜひご参加ください。

場所：伊達みらいホール（伊達市役所前からバスが運行されます）

第2日目 9月13日(日)

9:30- 開会

全体司会：ジャック・ロシヤール(フランス、CEPN)
多田順一郎(放射線安全フォーラム福島支援チーム)

自己紹介

新規参加者の自己紹介(各1分で名前、専門、経験などを述べる)

9:45-12:30 セッション4：メディアと社会(150分)

発表：伝える、受け取る、そして媒介するものからの報告

大森 真(テレビユー福島)：これまでの報道を振り返って
早野 龍五(東京大学)：測って伝える

伴 由祈子(東京、大学生)：点を線に、線を面に
宮井 優(東京、フリーランス)：東京の報道番組ディレクターとして「福島」と
の距離

宮崎 真(福島県立医科大学)：リエゾンの視点からみる4年半
佐倉 統(東京大学)：グローバルな現象-東京のミニメディアで福島を取り上げる
影山 美知子(元教諭)：風土にいかされ 風土を生きる

パネル2：あれから三年(45分)

ファシリテーター：安東 量子(福島のエートス)

パネリスト：山本 司真(横浜)
勝見 五月(伊達市)
原田 徳子(伊達市)
古関 純子(伊達市)
菅野 純子(伊達市)

12:30-13:30 昼食

弁当の用意があります

13:00-13:40 セッション5 発表(40分)

Raisa Misiura(ベラルーシストリン地区、小児科医)：
Rehabilitation and recovery program to engage people from local communities.

14:00 – 16:00

セッション6 対話：対話：ステップ2—未来への歩み

司会：ジャック・ロシヤール（フランス、CEPN）

報告担当：テリー・シュナイダー（フランス、CEPN）

ステップ2の進め方：

ステップ1で対話参加者は設問に対する回答を2回行う。

初回は自分の意見を述べる。

次回は他の方々の意見を聞いたあとで、自分の意見を述べる。

パネル討論参加者（26名）

住民

富田 愛（ビーンズふくしま）

後藤 素子（小高、新潟）

但野 謙介（南相馬）

高村 美春（南相馬）

志賀 貴光（浪江町）

安東 量子（福島のエートス）

遠藤 真也（末続）

高木 宏（末続、区長）

門馬 麻衣子（いわき）

高井 潤（東京、写真家）

菅崎 晋（いわき）

勝見 五月（伊達市）

原田 徳子（伊達市）

古関 純子（伊達市）

菅野 純子（伊達市）

伴 由祈子（東京大学）

山本 司真（横浜）

宮井 優（フリーランス、東京）

専門家・行政

佐藤 理（福島学院大学）

佐倉 統（東京大学）

早野 龍五（東京大学）

影山 美知子（元教諭）

保健医療

宮崎 真（福島県立医科大学）

報道

早川 正也（民報）

菊池 克彦（民友）

大森 真（テレビュー）

16:00 – 16:30 休憩

16:30 – 17:00 報告担当者によるまとめ

報告担当：テリー・シュナイダー

17:00 – 17:30 閉会

全体のまとめ（10分）

テッド・ラゾ（フランス、経済開発機構）

閉会の挨拶

ジャック・ロシャール

これまでのダイアログセミナー

国際放射線防護委員会（ICRP）は、長期汚染地域居住地域住民の防護に関する勧告において、汚染地域の住民と専門家が状況の対応に直接関与することが効果的であること、および国や地域の行政は地域住民が自ら決定しうる状況を作りだし、その手段を提供する責任があることを強調している。

この観点に基づき、ICRPは、2011年秋以来、会合を開催し、福島県の代表、専門家、地域住民の方々、およびチェルノブイル事故について経験を有するベラルーシ、ノルウェー、フランスの関係団体からの代表などが、福島原発事故の影響をうけた地域の長期の回復に対する挑戦についてその方策をさぐるためのダイアログセミナーを行った。

2011年11月の第一回ダイアログセミナーは、ステークホルダーによる影響をうけた地域とそこでの懸念についての討論の促進を行った。

2012年2月の第二回ダイアログセミナーでは、福島県の地域住民の状況と問題に焦点を当て、状況の理解の進展と、汚染地域の回復に向けた経験の共有することの価値を認識した。人々は、状況についての懸念を表明した。

2012年7月の第三回ダイアログセミナーは、とりわけ困難な食品汚染の問題について、異なる要求をもつ消費者、流通業者、生産者に来ていただき、食品の品質の改善と消費者の信頼獲得にむけて議論した。

2012年11月の第四回ダイアログセミナーでは、これまで3回のダイアログを通して得た理解を踏まえ、子どもの教育を取り上げた。参加者は放射線防護の備えの重要性を強調し、線量測定が個人個人の放射線状況を把握する重要な道具であると認識した。事故の記憶と経験は、その困難においてのみならず、積極的な側面もあることが認識された。

2013年3月の第五回ダイアログセミナーは、「帰還」を取り上げた。帰還する、しないの決断は、単に放射線状況のみならず、長期汚染を受けた地域での生活の全ての状況を考慮してなされる。帰る・帰らない、留る・去る、の選択肢どれも困難を伴う。また決めかねている間に状況は刻々と変化する。この複雑で困難な問題について、幅広い関係者、組織、住民、教師、医師、行政、チェルノブイル経験者が一堂に会し、立場の違いを越えて、汚染地域の困難な状況に前向きに立ち向かうために共有すべき価値を探った。

2013年7月の第六回ダイアログセミナーでは、「飯舘」の人々が直面する現状と挑戦を取り上げた。2日間の熱心な議論を経て、4つの勧告がまとめられた。それらは異なる見解を表現することに敬意をはらい、情報の交換を助け、自ら定めることを推進するダイアログの場を作る。村民、研究者、専門家が協力して住民のためのプロジェクトを推進するための枠組みを確立する。除染の優先順位を定め、村民の被ばく低減に有効な他のすべての可能な方策について検討する。ご高齢の方々が飯舘に帰るか帰らないかを自ら決断するための状況を可能な限り速やかに作り上げる。

2013年11月の第七回ダイアログセミナーは、いわきと浜通りの人々が専門家と共におこなった自助活動に焦点を当てた。本ダイアログは、これまでと違って、人々やコミュニティが、専門家の指導のもとにどのようにして身近の環境を理解しその状況をコントロールする活動に取り組んだかについての一連の証言が発表された最初のもので

あった。発表や討論を通じて、これまでのダイアログの勧告にある個人線量の測定、自助による防護、経験の交換、人々やコミュニティーの必要に応じた専門知識の役割、などを実際の場で役立てることができ、しかもそれが住み慣れた地域でまともな生活を送るため、人々を支援する上で効果的であることが明らかになった。

2014年5月の第八回ダイアログセミナーは、地震、津波、原発事故の3重の災厄に見舞われた南相馬市に焦点を当てた。南相馬市は、警戒区域、屋内退避区域、指定のない区域に三分され、かつ指定の無い区域にも特定避難勧奨地点が散在する。この極めて複雑な放射線状況の中で、住民の間での情報と理解の共有は極めて困難である。当初市民の9割が避難した。そして人口の5割程度までは戻った現在でも、家族内で別れて避難を継続する人々は少なくない。そのなかで放射線に対する不安と政府・専門家に対する不信は今も人々の心の奥底にある。このような中で、一部の人々は、自ら、また外部専門家等の支援を受けつつ、地域の放射線状況の理解と改善、復興のためこれからの30年を見通した活動を開始している。

2014年8月の第九回のダイアログセミナーは、「福島で子どもを持つ」というテーマで開催した。本会合では、放射線が福島の人々の日常のなかで、子育てに大きな影響を与えていることを取り上げた。放射線は、子供の健康影響のみならず、母親の心にも大きな影を落としている。子供の健康への懸念から県外へ避難する方がおられる一方で、子供の心身面での健康と家族の絆を重視する観点から、あえて福島での子育てする判断した方もあり、さまざまな局面から対話がなされた。会合には、子育ての悩みを持つお母さん、保育所・幼稚園心理関係者、それに大学等の研究者、さらに報道関係者や自治体・国の行政担当者などの参加があった。

2014年12月の第十回のダイアログセミナーは、「伝統と文化」というテーマで開催した。「福島における伝統と文化の価値」のテーマで開催した。福島原発事故では、放射線が人々の日常生活に侵入した。その放射線については、健康影響に関するさまざまな意見が氾濫し、政府の対応も混乱を極めた。これは、放射線の健康影響についての判断について人ごとに異なる状況をもたらした。その結果、夫婦、家族、コミュニティーなどあらゆるレベルでの分断が生じ、今に至っている。しかしこの状況にあってもなお人々が共有できるものに伝統や文化がある。伝統と文化は、守り育て受け継ぐものであり、これは、分断された状況のなかでも人々が共有し得るものである。そしてこの共有は人々をつなぐ。文化や伝統には、祭のような華やかな非日常の活動の中で保たれ、また野良仕事や食生活など生活の片隅の中にも今日まで息づいている。さらに伝統には古くから守られてきたものもあり、文化の中には現在も育ちつつあるものもある。今回のダイアログでは、放射線による分断の中でなお人々をつなぐものを学び、伝統や文化が復興にもつ意味について対話を行った。

2015年5月の第十一回のダイアログセミナーは、「測定し、生活を取り戻す」のテーマで開催した。福島第一原発事故では、原発から放出された放射線が、人々の日常に侵入した。健康影響をもたらすと言う放射線は、眼にも見えず匂いもないため、人々にとって実体が不明な存在である。実体が不明でかつ危険とされる存在が遍満するなかで、対抗する手段を持たない人々は、混乱し、自信を失う。そして、これまで美しく豊かで住む人々の誇りであった福島での生活は、変貌してしまった。

しかし福島ではこの事態を直視した人々も居り、それらの方々は、放射線の実体を知る努力を開始した。これはとりもなおさず放射線を測定することであった。これらの

方々は、ご自分で、あるいは専門家の協力を得て、日常を取り巻く様々な場や時間での放射線を測定し、自分の日々受けている放射線を測定し、食品の放射線を測定し、食品から取り込んだ自分の体内の放射線を測定した。

これまで実体が見えなかった放射線は、測定することで具体的な姿を現す。そして測定で明らかになった数値は、専門家と共有でき、また仲間と共有することができる。この活動により自分を取り巻く放射線の状況を理解すると、その状況に対して主体的な対応が可能になる。すなわち、恐れ惑い避けるだけしかできなかった放射線状況は、理解できると対応も可能になり、状況に対して主導権を取ることができる。すなわち放射線の測定により、人々は影響を受けた地域で生活を取り戻すことができるのである。

このようにして人々が放射線を測定することは、単なる作業以上の意味を持つ。今回は、放射線にたいする前向きな活動としての測定を取り上げ、これが分断の中でどのように人々をつなぎとめたかについて学び、対話を行った。